# 釜石の歴史よもやま話 1

## 釜石の鉄学編（1）

問い合わせ 市世界遺産課 ☎22-8846

本年度は橋野鉄鉱山を構成資産とする「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産となり5周年に当たります。これを機に釜石の鉄の歴史について6回にわたり紹介します。

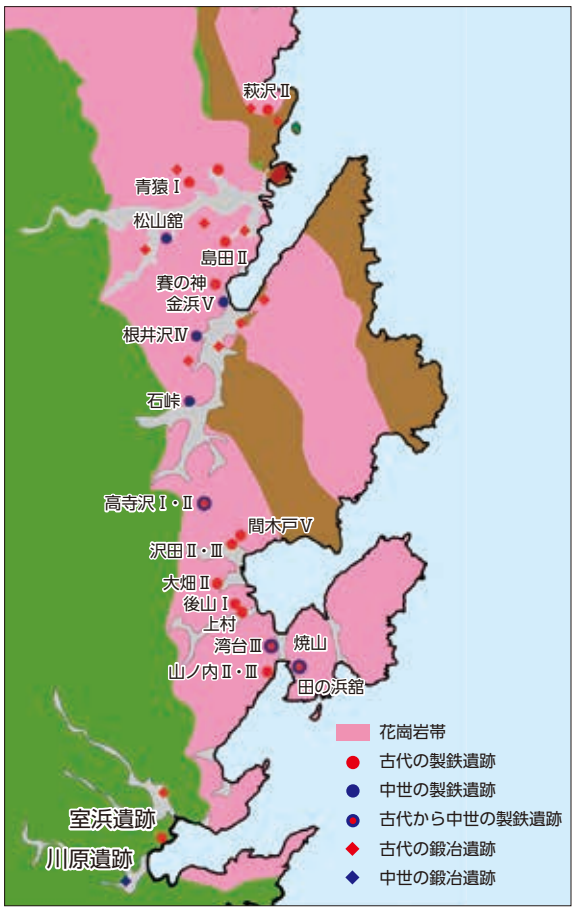
### 近代化以前の製鉄 ①

日本で鉄が使われるようになったのは、弥生時代と考えられますが、最初は大陸からの輸入で、簡易な鍛冶のみが行われていたようです。安定的な製鉄は6世紀後半、九州、中国、近畿地方で始まり、徐々に東に技術が伝播したと考えられています。

岩手県では、東日本大震災以降の三陸沿岸道路建設に伴う山田町間木戸Ⅴ遺跡の発掘調査で、8世紀後半の土器に伴って、製鉄の痕跡が発見されています。これまでの定説より古く、奈良時代から鉄づくりが開始されたと考えられています。

岩手県沿岸部には、1億2000万年前のマグマの隆起による花崗岩帯が広がっていますが、そのラインに沿って古代の製鉄遺跡が分布しています。

釜石市内では遅くとも10世紀後半から製鉄が開始されていたと考えられます。



古代・中世の製鉄関連遺跡

### 古代から中世の遺跡

#### 室浜遺跡

室浜遺跡は沿岸に伸びる花崗岩帯の最南端のはずれに位置しますが、11世紀（平安時代）頃の製鉄炉跡と炭窯跡が確認されています。また、鉄鏃（鉄製の矢尻）などの鉄製品も出土しています。周辺の花崗岩帯が風化して砂となり、浜などに打ち上げられた砂鉄を採集して製鉄が行われたと考えられます。

発見された製鉄炉
断面の下部には炭層が、上部には炉の上部構造が崩れた粘土層となっています

室浜遺跡出土の鉄製品

#### 川原遺跡

現在の釜石東中、鵜住居小の校庭として埋め立てられましたが、その下には川原遺跡があります。

川原遺跡では11世紀末から13世紀前半の中国陶磁器や東海系の陶器（渥美・常滑）、沿岸初の出土例である「てづくねかわらけ（手で成形した土器）」に伴って、大量の鉄製品や椀形滓と呼ばれる鍛冶滓、砥石などが出土しています。

川原遺跡の2次調査発掘部分
□で囲まれた部分は、1次調査での発掘部分です

川原遺跡の製鉄関連遺物

発行 釜石市
編集 広聴広報課
〒026-8686 釜石市只越町3-9-13 ☎22-2111 FAX 22-2686
ホームページ https://www.city.kamaishi.iwate.jp/